

学校経営報告

府中市立矢崎小学校
校長 堀 誠一

目指す学校 「明るいあいさつと笑顔が輝く学校」
～すべての教職員で 児童のチャレンジを応援する～

I 今年度の取組と自己評価

(1) 教育活動への取組と自己評価

① 確かな学力の定着を目指す教育活動の実践

すべての教育活動において、府中市立小・中学校の教育課程編成に向けたグランドデザインに示された4つの視点（「発見すること」「対話すること」「決定すること」「表現すること」）を重視し、児童が主体となる教育活動を行った。学級担任・専科担任が作成する週の指導計画でも、4つの視点を明記し、指導者の意識化を図った。

「矢崎スタンダード(学習規律)」「置き勉スタンダード」「筆箱スタンダード」の徹底を全校で目指した。児童や保護者に統一した説明を行った結果、持ち物に関する無用な混乱を生じさせることなく、学習に集中できる環境を整えることができた。

朝学習(e ライブラリアドバンスの活用や読書)や家庭学習(学年×10分)で基礎基本の定着を図る取組を行った。朝学習の時間に、個別指導が必要な児童を対象に、専科教員や時間講師等の協力のもと、取り出し指導を行った。児童のつまずきに応じた指導で、児童が意欲的に取り組んでいたことから、有効な手立てであった。

算数科においては、1・2年生で指導方法工夫改善講師を含めた少人数指導授業、3～6年生では、全単元において習熟度別少人数算数指導を計画的に行うことにより児童の習熟に応じた指導を行うことができた。

毎月の詩の暗唱の取組は、美しい日本語に触れる機会を創出し、語彙を豊かにするうえでたいへん効果的であった。繰り返し唱えることにより、児童に確かな言語感覚を身に付けさせることができた。この取組は何年も継続して取り組んでいるため、学校文化として根付いている。

各学年の学習成果発表の場として、学芸発表会及び図工・家庭科作品展をそれぞれ毎年実施し、文化的行事を通して発達段階に応じた表現力、集団活動を通じた社会性を育むことができた。学芸発表

会での演目（1・4年生は群読、2・5年生は音楽、3・6年生は劇）の固定化が児童にも保護者にも定着し、本校の特色ある教育活動の一つとなっている。また、今年度初めて高学年児童の製作した家庭科の裁縫作品を保護者に向けて公開した。それほど多くの鑑賞者はなかったが、来校した保護者には好評であった。今後毎年続けていきたい取組である。

授業改善推進プランの作成に当たっては、6年生児童が実施した全国学力・学習状況調査の結果や体力調査等、本校の児童の実態を踏まえたプラン作成を意識し、持続可能な改善の具現化を図った。2学期末・学年末には作成した授業改善推進プランの検証を行い、達成状況を矢崎小学校のホームページで公開した。

② 基本的な生活習慣と豊かな心の育成

気持ちの良いあいさつ（語先後礼）と返事を心掛け、感謝の気持ちをしっかりと言葉で伝えられる児童育成に取り組み、毎日気持ちよく過ごすことのできる学習環境を整えた。語先後礼については、指導が不十分であったと感じている。来年度、生活指導部を中心に徹底を図りたい。「あいさつ運動」を1・2学期に1度ずつ、年間2回実施した。高学年児童が模範になり、立ち止まって相手と目を合わせるなど、相手意識をもったあいさつを交わせる児童が増えている。高学年児童自ら「矢崎小の良いところは、あいさつがきちんとできる」と長所を誇っている。

学校経営において「温かい人間関係づくり」を土台として、児童同士・児童と教師の良好な関係を構築してきた。児童の「せいかつアンケート」を毎月確実に実施し、外見からは見えづらい児童の心の状態を表出させることと同時に、いじめの未然防止・早期発見・早期対応につなげようとしたが、組織として迅速な初期対応ができず、解決までに時間を要した事案が発生してしまった。改めて、担任任せにせず、学校全体で組織的に取り組む体制の強化の必要性を職員全体で確認した。そして、いじめ問題の発生を契機として、児童会主催による「いじめ防止のための学級スローガンづくり」に全学級で取り組んだ。この取組を通して、児童に自分事として「いじめ問題」に関わらせることができた。この事案による課題と反省を次年度に生かしていく責務が学校としてあることを痛感している。一方、友だちの行動を好意的に評価する記述もアンケートから読み取れた。それをふれあい月間の「エールウイーク」の機会に全校朝会で紹介し、児童の自己肯定感を高める効果が認められた。

不登校や登校渋り傾向にある児童に対しては、定期的に校内委員会を開いて学校全体で組織的かつ個別に対応を続けた。登校はできるが、教室に足が向かない児童の受け入れ先として、サポートルームの運営体制を整え、居場所づくりに努めた。年間30日以上欠席児童は11人で、昨年度比4人の減である。サポートルームの存在が児童・保護者に浸透し、利用者が増えていることも改善の一因と考えられる。また、登校が困難な児童に対しては、SSWを介して児童や家庭との接点の維持に努めた。

道徳科の授業では、学年間交換授業（2学級の学年）やローテーション授業（3学級の学年）を積極的に推進した。教材研究の充実を図るとともに、児童理解を深めることができた。また、いじめ防止の授業を計画通り年間3回実施した。

交通安全教室やセーフティ教室、水害を想定した避難訓練などを予定通りに実施し、安全教育を充実させることができた。また、今年度はじめて、府中市立小中学校全校で引き渡し訓練を実施し、万一の際の保護者の動きや児童の引き渡しについて確認する機会をもった。今年度の反省を次年度以降に生かしていきたい。昨年度より、月初めの児童朝会を「安全朝会」と命名し、安全指導に特化した朝会を行っている。2年目となる今年度は、児童にも「安全朝会」は定着し、児童自身が自他の安全に気を付けて行動しようとする意識が育っている。

③ 健康教育の充実と健やかな体の育成

体育科の学習の授業改善を図るとともに、体づくり運動を授業の中で充実させ、年間指導計画に「持久走」「府中ロープチャレンジ」の取組を位置づけ、児童に運動の楽しさを体感させ、運動の日常化を図ることができた。「府中ロープチャレンジ」の取組では、各学級で児童に目標を立てさせ、記録達成に向けて練習を繰り返した結果、多くの学級で、友達と一緒に運動する楽しさと達成感を味わわせることができた。「持久走記録会」に向けた取組では、ここ数年恒例となっている帝京大学駅伝競走部の学生を今年度も招聘し、児童が学生とともに走る体験を通して記録会への機運を高めた。

昨年度より始めた運動朝会が定着し、今年度は7回行うことができた。集団行動やラジオ体操、リズムダンス等、内容は多岐にわたり、様々な運動を行うことで児童に体を動かす楽しさを味わわせることができた。また、行間体育「矢崎アクティブタイム」では、体力テストで本校の課題として浮かび上がった「ソフトボール投げ」と「立ち幅跳び」の技能習得につながる動きを意識して、継続した取組を行った。

6月から9月の4か月間を「熱中症予防期間」として年間計画に位置付け、熱中症予防の徹底を図った。この期間は中休みや昼休みを室内で過ごすよう推奨し、遊びの内容も児童に考えさせた。校庭での活動を極力避けることで、児童の安全を守ることができた。

毎月1回発行する「学校だより」に「家庭でできる!体力向上」のコーナーを設け、家族で取り組める運動の紹介を今年度も継続し、保護者への啓発を行った。

給食主任や養護教諭を中心として、給食指導・食育・食物アレルギー事故防止対策等を組織的に推進し、安心・安全な給食の提供に努めた。

④ 教職員の研鑽と指導体制の確立

年間指導計画・週ごとの指導計画に基づき、常に計画・実施・評価・改善を念頭に教育活動の改善・充実に努めた。職員会議において定例校長会報告等に基づく資料を作成し、国・都・市の施策、教育動向を踏まえた校長の方針を職員に分かりやすく提示するよう心掛けた。そのことによって、全教職員の共通理解を前提とした足並みを揃えた教育活動を展開することができた。

児童の実態を踏まえた学習指導を行ってきたが、教科・内容によっては授業改善を行い、より充実した質の高い授業を展開する必要があることを感じている。今後も教員が明確な目標に向かって、見通しをもった教育活動を推進したい。

学習指導要領の趣旨を生かし、第6学年児童が行った全国学力・学習状況調査等の結果や児童の実態を踏まえた「授業改善推進プラン」を作成した。日々の授業実践を通して2学期末・年度末に検証を行い、改善点を明らかにした。児童の学力向上に向けて、教職員の地道な教材開発・教材研究と授業力向上は、今後も課題である。

主幹教諭や学年主任を中核とした OJT を日常化し、経験年数の少ない若手教員の授業力向上や児童理解の育成を図った。また、年間を通して計画的にミニ研修を開催し、新しいソフトウェアの指導法（Canva の使い方）や府中市保健師を講師に招いて嘔吐物処理研修を行うなど、教員が学びたいニーズに合致した内容で進めることができた。

校内研究では研究推進部のリーダーシップのもと、研究主題を「なんだろう？やってみよう！と課題に向き合い、粘り強く取り組む児童の育成」と設定し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくりに取り組んだ。研究の進め方は、教員を5つのグループに分け、中堅教員をリーダーに据えて、人材育成を図った。グループ毎にサブテーマを設定し、研究テーマに迫ったため、各人の求めたい課題に直結する研究ができ、成果を挙げることができた。

自己申告に基づく授業観察の機会も OJT の一環として位置づけ、できる限り教員間で授業を見合う環境を整え、授業参観後は教員間で指導助言を行うことにより、相互に授業力を向上しようとする雰囲気在校内で醸成されている。来年度はさらに一歩進んで、日常的に活発に授業参観をし合い、授業力を高めようとする姿勢を形成したい。

専科教員を交えた拡大学年会を今年度も計画的に行った。低・中・高学年ブロックに、専科教員によるブロック担当教員を配置し、可能な限り多くの教員が目で見守り、情報を共有する体制が整備された。

⑤ 開かれた学校づくりの積極的な推進

運動会・学芸発表会等の大きな行事を計画的に開催し、多くの保護者・地域の方々に来校していただいた。参観者からのアンケートでは、子供たちの成長を感じたとの声をたくさん集めることができ、概ね好評であった。

道徳授業地区公開講座を含む学校公開（授業参観）の機会を各学期に1回以上設けた。事前の案内を周知することによって、できるだけ多くの参観者が来校できるよう努めるとともに、日常の学校生活の様子を保護者に参観してもらうことができた。

学校だよりや保護者会、学校のホームページ等を活用して本校の教育活動や校長の経営方針を積極的に発信した。ホームページの学校ブログを活用して児童の学校生活の様子をきめ細かに紹介した。学校ブログでは、特に宿泊行事をはじめとする校外学習での児童の様子がよくわかると保護者から好評であった。

保護者を対象とした学校評価、教職員による学校評価、児童に回答させた学校アンケートをそれぞれ行った。評価項目を3者で統一したことにより、意識の相違が明らかになった。児童が「できている」と回

答した項目でも保護者・教職員が「できていない」と考えている項目があり、反対に児童より保護者・教職員の回答が肯定的である項目が何件もあり、回答結果を来年度の教育活動に反映させていく必要を感じた。

スクール・コミュニティ協議会を年3回開催し、学校に関わっている委員に学校の近況や成果・課題を報告するとともに、地域での児童の様子について情報を得ることができた。あいさつが不十分な学年があるなど、課題について共有することができたことも大きな成果であった。3回目の協議会では、委員が児童と給食を一緒に食べる機会を設定した。普段の学校生活や児童の活動する様子を直接見ていただき、児童と触れ合う時間がもてたことから、とても有意義な取組となった。

スクール・コミュニティ協議会主催事業として漢字検定と算数検定を1回ずつ行った。漢字検定は79名、算数検定は31名の受検者があった。児童の学習意欲を喚起する活動となることから次年度以降も続けていきたい。

⑥ 「小中連携・一貫教育の充実」に向けた府中第三中学校・南町小学校との連携

第三中学校区スタンダード「み(身だしなみ)・そ(そうじ)・あ(あいさつ)・じ(時間)・じ(授業)」のもと、小・中学校9年間の「学び」と「育ち」の連続性の推進を図った。本校では授業を除く「みそあじ」のポスターを独自に作成し、児童に可視化させて徹底を促している。また、毎月の生活指導目標にも「みそあじ」を関連付けることによって児童への意識化を図った。

各教科・領域における「9年間の学びと育ち」に関する実践では、育てたい児童・生徒像を明確にして年間3回の授業公開を含めた交流を行い、小中連携の日では、授業参観後に全体会・分科会の運営を計画的に行うことができた。来年度は、グランドデザインの4つの視点に力を入れていきたい。

(2) 重点目標(数値目標)

① 毎日の学校生活が楽しいと思える児童が90%以上

児童アンケートでは86%と目標を達成できなかったが、昨年度より5ポイントもの上昇がみられた。保護者アンケートでは92%と目標に到達した。今年度も目指す学校像に「明るいあいさつと笑顔が輝く学校」を掲げたが、授業がよくわかって楽しい、友達といて楽しいと感じている児童が数多くいることがわかった。しかし、否定的にとらえている児童が一定数存在していることは否めない。児童にとって自分の安心できる居場所があり、楽しいと思える学校を構築していくことを課題と捉える。

② 学校の授業がよくわかると思える児童85%以上

児童アンケートでは86%、保護者アンケートでは88%との回答で、どちらも目標を上回りうれしい結果であった。昨年度比、児童は6ポイント、保護者は11ポイントもの向上がみられる。本校では、全国学力・学習状況調査の結果や各学年の児童の実態を踏まえ、授業改善推進プランを策定し日々授業改善に取り組んできた。また、算数科では全学年で少人数指導を行い、児童の実態に応じた指導を行うことで

児童一人一人の躓きの解消に努めている。さらに、昨年度より朝の時間に専科教員等による個別指導を始め、基礎基本の定着を図ってきた。このような取組の成果が数字に表れているのではないかと推察される。今後も、児童が「わかった」「できた」と実感できるような指導方法を工夫していきたい。

③ 漢字・計算の定着率が85%以上

漢字定着率は全校平均94%、計算力の定着率は全校平均91%とどちらも昨年度の結果を上回り、かつ目標を超える数値となった。算数の計算力に関しては、朝学習の個に応じた指導や e ライブラリの活用、家庭学習等に繰り返し取り組んだ成果の表れであると考え。今年度取り組んできた指導方法や指導体制を維持し、基礎基本の定着を図っていききたい。

④ 本を読むことが好きだと思える児童80%以上

児童アンケートの結果は72%と目標に達することができなかった。この数字は、昨年度と同じ結果となっている。本校は、年間3回の読書旬間を設定し、読書活動を推進している。旬間中は図書委員会児童による企画を通して読書への興味・関心を高めてきた。また、定期的に朝の時間を使って読書を行ったり、保護者や担任による読み聞かせを積極的に行ったりしてきた。

学校経営支援員として図書館担当支援員を1名配置し、学校図書館の環境整備を行っている。来年度も継続して配置し、児童が利用しやすい学校図書館の充実に努めていきたい。

⑤ 家で「10分×学年」の家庭学習をする習慣が身に付いている児童80%以上

児童へのアンケートでは76%の結果となり目標到達には至らなかった。タブレット端末の利便性を生かして、家庭での活用を促進しているところである。また、学習内容に応じて、デジタルに適した学習方法と紙(ノート)を使った学習方法を使い分けた家庭学習の課題を出している。家庭での学習は保護者の協力が欠かせない。今後も保護者の理解を得て、協力を要請していきたい。

⑥ 気持ちのよいあいさつができる児童90%以上

保護者アンケートでは69%と目標を大幅に下回ってしまった。児童アンケートでも80%と目標到達に及ばなかった。この数字は、昨年度調査結果に比較して、8ポイント低下している。

今年度も「あいさつ運動」の取組を年間2回行い、児童一人一人に自分のめあてをもたせて取り組んだ。相手意識をしっかりともたせてあいさつをする指導を繰り返し行った結果、相手の目を見てあいさつができる児童が増加傾向にある。また、昨年度に引き続き校外における地域の方々に対しても、きちんとしたあいさつができるように指導に力を入れた。「明るいあいさつ」は学校経営方針の最重点事項である。引き続き指導に取り組んでいく所存である。

⑦ 遊んだり相談したりする友達がいる児童90%以上

児童アンケートは91%の回答があり、目標に到達した。保護者アンケートの結果も児童とほぼ同程度で90%の結果であった。学校の教育活動は授業が中心であるが、数多くの行事や休み時間など様々な活動が含まれている。どの活動であっても友達の存在は欠かせないと考える。学校は、それぞれの活動を通して、良好な友達関係を形成する機会となることを認識する必要がある。

本校では児童の「せいかつアンケート(心の健康観察)」を毎月行っている。アンケートの結果をもとに、児童の抱える不安や悩みを捉え、早期に払拭することで安心して毎日の学校生活を送らせたいと考える。

⑧ 「自分にはよいところがある」と考える児童80%以上

児童アンケートで79%と、目標をわずかに下回ってしまった。保護者アンケートの結果は86%と目標値を上回っている。本校ではここ数年、児童の自己肯定感の低下が課題とされてきていて、学校をあげて児童に自信をもたせる取組を行っている。「ふれあい月間」を基調とした「エールウイーク」では、学期に1回、全校朝会で学級の代表者の「模範的回答」を紹介し、称賛する機会をもった。今後も友達のよさや自らのよさを認め合える環境を創出するとともに、教職員から児童への肯定的な評価を続けていきたい。

⑨ 学校のきまりを守って行動できる児童90%以上

昨年度の結果同様、児童・保護者共に90%が「きまりを守って行動できている」と回答し、目標を達成している。アンケート結果によると、ほぼすべての学年の児童が、学校や学級のきまり事を守って生活していることが分かる。学校全体が落ち着いているのは、最上級生の6年生児童が下級生に対して模範となる行動を示していることが理由の一つに挙げられる。次年度以降も矢崎小のよき伝統として継承していきたい。

⑩ 自分の安全を自分で守ろうと心掛けている児童90%以上

保護者アンケートで89%と目標をやや下回ってしまったものの、児童アンケートでは95%の回答があり、目標を大幅に上回る結果が得られた。毎月1回の避難訓練に加え、昨年度から新たに毎月1回全校での安全朝会を設け、全校体制で安全指導の充実を図っている。安全指導を組織的・計画的に行うことにより、自分の安全を自分で守ろうとする意識を高められたのだと考えられる。今後も安全朝会の取組を続け、児童の危機管理意識を高めていきたい。

2 次年度以降の課題と対応策

- (1) すべての教育活動において、「府中市立小・中学校の教育課程編成に向けたグランドデザイン」を踏まえた教育課程を編成する。学力の基礎基本を定着させることを目指し、朝の時間を有効活用する。また、児童の学習意欲を喚起するために個別最適な学びを進める。令和8年度から導入されるデジタル

教材「ミライシード」の有効活用を図るとともに、デジタルとアナログの双方のよさを生かした授業を展開する。

- (2) 全教育活動を通して児童に思いやりのある明るい心を育む。特に、人権尊重教育や道徳教育の一層の充実を図る。「せいかつアンケート」を毎月実施し児童の自己肯定感を高めるとともに、いじめ・不登校等の未然防止・早期発見・早期解決を本校における最重要課題との全教職員共通理解のもと、問題に対して迅速かつ的確な対応を行う。
- (3) 児童に運動に親しむ態度の育成と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。来年度は運動朝会の定着を目指し、内容の充実を図る。また、学校だよりで「家庭でできる運動」を紹介することによって、保護者への啓発を行う。さらに行間に行うことのできる体育的活動に取り組むことによって、児童に基本的な動きや技能を身に付けさせる。
- (4) 自らすすんでコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるために、言語活動の充実を図るとともに、校内研究での学習を通して、主体的・対話的に学ぶ児童の育成を目指す。また、中・高学年に外国語活動及び外国語科の専科教員を配置し、外国語活動・外国語科の授業を充実させる。
- (5) 毎月の避難訓練や府中市防災の日（引き渡し訓練）及び安全朝会を通して、自他の生命を守る能力・態度を養う。各家庭配布の防災マニュアルやスマート連絡帳でのメール配信、学校ホームページ等を活用して災害時の情報発信に努める。

3 予算の活用

① 学校経営支援員予算の活用

配当額…3,774,360円（学校経営支援2,333,860円、サポートルーム支援1,440,500円）

執行額…3,772,810円

執行率…99.9%

〈成果〉

今年度よりエデュケーション・アシスタントが導入され、第1学年への支援を昨年度より手厚く行うことができた。本校では学習・生活及び特別支援教育支援員に加え、学校図書館指導補助員と理科支援員を配置している。学校図書館指導補助員は、読み聞かせ・ブックトーク・調べ学習の資料集め等、図書館運営全般に携わり読書活動の推進に貢献した。学習支援員は個別指導や少人数指導の補助として指導に当たり、児童の習熟に合わせた指導を丁寧に行った。生活及び特別支援教育支援員は、特別な

支援や配慮を要する児童に寄り添い、心を落ち着かせて学級内外で学習・生活ができるよう支援を行った。また、理科支援員の配置により、理科室の環境整備が改善した。また、実験・観察の準備・片付けも安心して任せることができたので、授業の質が一段と高まった。

昨年度よりサポートルーム付きの支援員配当額措置により、サポートルームを利用する児童に安心して学習する人的な環境を整えることができた。今年度本校では9名のサポートルーム利用登録者があった。そのうち4名がほぼ毎日利用していたが、支援員が常に傍にいることによって、集中して学習に向かうことができるようになった。

〈課題〉

大きな額の予算が配当されているため、計画的な執行を行い、無駄なく最大限有効に活用していくことが求められている。年度当初に想定しなかった児童対応が発生した際、支援員差配の計画変更を臨機応変に行って行く必要がある。

② 副校長等校務改善支援員の活用

配当額…1,049,280円

執行額…1,049,220円

執行率…99.9%

〈成果〉

主に副校長からの指示を受けてパソコンを操作して業務に従事する支援員が2名、印刷業務等、教職員の事務処理を請け負う支援員を2名配置している。多岐に渡る業務に対し、正確かつ迅速に職務を遂行していた。副校長付きの支援員の配置によって、副校長が教員に対する人材育成や外部との折衝等に費やす時間を生み出せている。教職員にとっては、教材研究をしたり、学級事務に専念したりする時間及び児童とじっくり向き合う時間を生み出せている。

〈課題〉

副校長が校務全体に精通し、優先順位を考慮しながら教職員の事務量軽減につながるような指示を的確に出すことが欠かせない。

③ 音楽活動等振興費

報償費

配当額…62,400円 執行額…59,200円 執行率…94.9%

振興費

配当額…30,000円 執行額…29,150円 執行率…97.2%

〈成果〉

本校の特色ある教育活動の一つである和太鼓クラブに対する報償費である。和太鼓クラブは、府中の森芸術劇場「どリーむホール」を会場に行われた「青少年音楽祭」と「太鼓の響」の二つの演奏会に出演した。和太鼓クラブは、年12回のクラブ活動の時間のみならず、平日の朝の時間や夏季休業中も活動し、発表の場では練習の成果を遺憾なく発揮している。報償費はクラブ活動等で練習する際にご指導いただいた講師への謝礼金である。講師の先生から専門的な指導を受けたことで、児童は意欲をもって練習に取り組むことができ、演奏会での達成感にもつながっている。

④ 学校と家庭の連携推進事業

配当額…383,040円

執行額…382,710円

執行率…99.9%

〈成果〉

本事業を行うことで、家庭と連携しながら丁寧に児童対応をすることが可能である。主に不登校傾向にある児童に寄り添った支援を行っている。

〈課題〉

児童一人一人のニーズに合わせた支援を行うため、適切な支援方法を考える必要がある。また、複数名の対象児童がいるため、優先順位をつけながら計画的に支援をしていくことが課題である。